



# CIF JAPAN

NEWSLETTER No.49  
<https://cif-japan.com/>

## Council of International Fellowship Japan

発行人: NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂岡隆司  
 編集人: 加納光子 発行日 2022 年 9 月 1 日  
 事務局: 〒607-8216  
 京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館  
 TEL 075-574-2800, Fax 075-574-0025

目次	理事長挨拶	1 頁
	理事会・総会報告	1 頁
	CIF INTERNATIONAL の動き	2 頁
	理事・監事挨拶と近況報告	3 頁から 6 頁

## ご挨拶

理事長 坂岡隆司(1987 年 Cleveland)

このたび、坂本前理事長のあとを引き継ぎ、理事長のお役をお受けすることになりました。皆様のご協力を頂き、力をあわせて何とか意義ある活動をして行きたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

私は、1987 年の CIP で、オハイオ州クリーブランドの研修に参加しました。今からもう 35 年前になります。アジア、アフリカ、欧州、南米などの世界各国から 30 名ほどの研修生が集まりました。それぞれのテーマや専門に応じた現場での実習、週に一度大学に集まっての講義やディスカッション。4 か月で 3 か所のホストファミリーには大変お世話になりました。本当に楽しく有意義な研修で、私のその後の仕事や人生に大きな力を与えてくれた大切な経験でした。これを是非、多くの方々に経験してほしいと率直に思っている次第です。

CIP の創設者、オーレンドルフ博士は、悲惨な戦争の体験から、平和のためには、人間どうしの草の根レベルの国際交流がいかに有用で大切であるか、と考えた人でした。確かに、国や文化は違っても、人が顔と顔をあわせお互い個人として知り合う、ということが広がれば、ある国は単なる国ではなく、彼、彼女がいま暮らしている国としてリアルに認識できます。それが、さらなる対話や理解を深めて行くことにもつながるでしょう。

今年に入って、ロシアのウクライナ軍事侵略が始まり、多く子どもや市民が犠牲になりました。今もそれは継続中です。分断や対立が激化するこの時代に、福祉や対人援助の専門家や実践者たちの、CIF のような草の根の交流研修は、とても貴重なものではないかと思えます。学生の留学でもなく、政府系の視察でもなく、

まさに民間の手による草の根の交流です。

ここ 2、3 年コロナの影響で、対面での交流研修が難しくなりましたが、最近の CIF 各国の動きをみると、いくつかの国々で徐々にプログラムを再開しつつあります。ぜひ、日本から各国プログラムに参加する方を掘り起し、積極的に送り出していきたいと思えます。

私たち日本支部も過去 2 回プログラムを主催し、7 名の参加者を受け入れました。2020 年予定していた 3 回目はコロナで流れましたが、機会をみてぜひ再企画したいと思えます。

CIF 国際研修をきっかけに、日本の福祉にどんどん国際的な視野で活躍する人材が出てくることを願います。そのためにも常に内外に窓口を広げておきたいと思っています。

\*\*\*\*\*

## 理事会・総会報告

2022 年度の理事会・総会は、5 月 21 日(土)、コロナの影響が残る中、会場を救世軍渋谷小隊(東京渋谷区)にして、対面、オンライン併用のハイブリッドで開催されました。一昨年が書面表決、昨年在完全オンライン、そして今年是对面とオンライン併用と、少しずつ変化しています。何と早くコロナが落ち着いて出来るだけ集合で会議ができたらと願います。

出席状況ですが、理事会では、理事 7 名全員出席、監事は 1 名出席(委任状 1)でした。また総会では、出席 8 名、委任状 15 名でした。皆様のご協力に感謝いたします。

理事会、総会の議事の概要は以下の通りです。

●2020 年度補正予算、2021 年度事業報告、決算報告、監事監査報告は、議案通り承認されました。

- 任期満了に伴う役員改選の結果、以下の通り、新役員が決まりました。

理事：坂本正路、梶村慎吾、坂岡隆司、加納光子、三宅浩、江口敏一、藤原望美

監事：冷水豊、上利久芳

\*これまで理事(副理事長)としてご尽力いただいた浅野純江氏は、今回をもって退任されることになりました。浅野氏に対し、理事会、総会でそのご労に対し感謝の意を表明すると共に、可能な限り引き続きご協力いただきたいとお願いしました。

- その後、理事の互選の結果、理事長、副理事長の4名が下記の通り決定しました。

理事長 坂岡隆司

副理事長 梶村慎吾、三宅浩、江口敏一

- その他として、国際研修応募者の資格要件にある国籍条項「日本国籍を持ち、…」につき、これは多様性を認めようとする今の時代に合わず、国際標準にも合わないの、削除してもよいのではないか、という提案がありました。

これについて、いろいろ議論しましたが結論は出ず、最終的に「国籍条項を削除するとしたら、代わりにどのような条件を付けたら良いか、引き続き検討する。決定は理事会に一任する。」ということになりました。

(坂岡隆司記)

## CIF INTERNATIONAL の動き

CIFには現在、31の各国支部と1団体(CIF・USA)、12か国のコンタクト・パーソンが加盟しています。2022年4月30日、オンラインで開催されたCIF各国支部代表者会議でCIF・USA リサ・パーディ会長から活動報告がありました。同会議の議事録から「CIF・USA 会長報告」を抄訳してその近況をお知らせします。対人サービス分野の短期研修(数週間)、インターン対象の長期研修(1年以上)、海外の学生を教師補助としてアメリカの高校等に迎えるプログラム(例:スペイン人学生をスペイン語教師補助として招聘する)、ビルディング・ブリッジプログラム(相互交流の架け橋となる人材の訓練をおこなう)など、新しいプログラムにも挑戦している様子が報告されました。

## 『CIF・USA会長報告』CIF代表者会議議事録より

### 1. 「ビルディング・ブリッジ プログラム」

研修参加者の出身地(海外)と参加者を受け入れる地域(アメリカ国内)の住民、双方が交流の架け橋となることをめざして訓練をおこなうプログラムが2017年から始まっている。2022年6月にはスペインとフィンランドから参加者を迎えて実施される。

### 2. 「ドイツ社会福祉従事者研修プログラム」

CIFはオレンドルフ氏が初めてドイツの社会福祉従事者を招いて行ったこの研修を毎年続けてきたが、コロナ感染症拡大によりこの2年間は中止を余儀なくされた。本年9月には再開できるよう準備を進めている。

### 3. 「ワークショップー人権侵害に立ち向かう」

CIFは本年1月、人権侵害被害者とともに歩む民間団体(クリーブランド所在)のパートナーとして活動を始めワークショップを開催した。その協議内容に多くの国々から関心が寄せられたので、第2回オンライン会議を5月19日に開催する。テーマは「人権侵害被害者への世界の視点」、ルーマニア、コロンビア、インドからの発表者を迎えて各国からの事例報告ののち協議をおこなう。

### 4. 「CIFとCIF・USAの協力」

CIFはかねてからCIF・USAとのパートナーシップのあり方を模索してきた。人的資源の共有、新しいプロジェクトの開発、一緒に活動する機会をつくるなど。CIF・USAのジョージ会長は両団体が協力し、メンバーがもつさまざまな分野の専門知識や経験を研修プログラムの構成やワークショップの運営、講義などに生かしたいと考えている。

### 5. 「CIF生涯教育履修証明書」

CIFは米国のソーシャルワーカーを対象として、「CIF生涯教育履修証明書」(既存の「CEU, Continuing Education Units 継続教育単位」に類する証明書)の発給を模索している。もし、公的な証明書として発給できれば、IPEPIに応募するソーシャルワーカーが増える予想される。

### 6. 「CIF創立70周年記念大会」

2026年、CIFは「CIF創立70周年記念大会」を米国クリーブランドで開催する。同年のCIF役員会ならびに代表者会議をクリーブランドに招待し、会合を対面で行なえるよう準備を進める。この記念すべき大会でCIP元参加者、CIF会員等が一堂に会することができるように願っている。

## 2022年 IPEP (国際交換研修プログラム)

### 開催国

IPEPは、コロナ感染症により開催中止を余儀なくされてきたが、2022年は下記11か国の支部が試行錯誤をしながら対面のプログラムを開催、または予定している。

オーストリア、フィンランド、ギリシャ、イスラエル、スウェーデン、アルゼンチン、フランス、イタリア、ネパール、オランダ、スイス(日程順。スイスは2023年3月)

(参考) Minutes BD Meeting April 30, 2022,  
Notes IPEP meeting July 2<sup>nd</sup>, 2022,  
[www.cifinternational.com](http://www.cifinternational.com);  
<https://www.cipusa.org>

### 今後の国際会議開催予定

2022年: CIF 各国支部代表者会議(10/21~23)  
オンライン

2023年: CIF 国際大会 開催国 ドイツ

2024年: CIF 各国支部代表者会議 同 モロッコ

2025年: CIF 国際大会 同 インド

(浅野純江記)

## ご挨拶と近況報告

### 退任にあたって

前理事 浅野純江(1996年 France)

このたび諸般の事情により役員を退任させていただきました。CIF ジャパンがNPO法人として登録されたときから役員会に参加を許され、会員の皆様とともに歩みを進めてこられましたことを心より感謝しております。

初めてCIPとCIFに出会ったのは1982年、国際社会福祉協議会に就職して海外研修プログラムを担当したときでした。「世界の人びとが政治、宗教、文化の違いを超えて相互理解をめざすことが世界平和に寄与する」というオレンドルフ氏の言葉に深い感銘を受けました。その後、私はフランスで開催された研修に参加しましたが、同国のすべてのメンバーがCIPやCIFの研修で学んだオレンドルフ氏の理念を世界の人びとに伝えたいという熱心な思いで研修生の受け入れをしてくれたことが印象的でした。21世紀になった今なお地球上に戦争が暗い影を落としています。このようなときにこそ相互理解の大切さを周囲の人びとに伝え続け

なくてはなりません。

今後は、家族の介護状況と自分の健康を整えながら一会員としてできる範囲で活動に参加させていただきたいと願っています。

\*\*\*\*\*

### 就任に向けて ご挨拶

新理事 藤原 望美(2021年 Finland)

ニュースレター読者の皆さま、こんにちは。

2021年 Finland 派遣の藤原です。近況報告ですが昨年度 3回も寄稿しており、もう新鮮味がないと思われないか心配です。7月より理事会の仲間に入れて頂きました。入会間もない新参者ではありますが、先輩方を見習い広報に努めたいと思っております。よろしくお祈りします。

仕事では成人女性の支援から子ども支援へ異動になり、数年前とは違う課題に直面し、鍛えなおされています。異動直後はムーブメントの時間でもあり春から夏にかけて少し足を延ばしました。4月には岩手県の内陸部遠野市へ、就職の決まった友人を訪ね、雪と寒さと貧困の中で人々が生きてきた歴史を感じて参りました。

5月には高齢の母と共にルーツを訪ねる大分県別府市へ。もうすぐ終戦記念日ですが、母は芦屋で空襲に遭い、祖母の実家である別府に逃げる途中に原爆投下直後の広島を通過しました。皮のめくれた人がたくさん歩いていたと話してくれます。玉音放送は岩国の駅で聞いたのだとか。平和なときには想像もつかない理不尽と不条理なことが沢山あった時代を思いおこし、「平和を作り出す者」の一翼であるCIFの働きに連ねられたことの意義を思わされました。

6月には長崎の世界遺産(長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産)を一部巡り、おもに島原の乱の舞台となった原城跡と敵対側の島原城を見渡しつつ、弾圧と抵抗・サバイブの歴史を感じました。島原の乱はご存知のように江戸時代最大の百姓一揆と言われていますが、その元凶は領主(松倉家)の異常なまでのキリシタン弾圧と不当に高い税率で年貢を取り立てた悪政です。政治は昔も今も人々の暮らしの基盤であるというシンプルなことを思わされました。

また友人の娘の進学祝いとして関東平野で気球に乗って参りました。当日は天候に恵まれ、極めて自然に(気が付かないうちに)籠がふわりと宙に浮き、離陸直前の飛行場のような緊張感も全くありませんでした。飛行機よりも100年以上早く人類を飛ばしてくれた乗り物によって、穏やかな平和な風を感じて参りました。ど

こまでも広がる関東平野。それは原初の世界のように  
 した。日本における気球の歴史の始まりは 50 年前の  
 早稲田・慶應大学の冒険部の部員による手作りの気  
 球作成に始まるのだとか。インターネットもない時代、  
 彼らは海外の書物に頼って手探りで籠を作り、気球を  
 ミシンで縫い、大空に飛び立つことを目指したパイオニ  
 アです。今から考えるとかなりリスクなことでもしていた  
 のだとパイロットに教わりましたが、彼らのトライアルが  
 今の日本の気球人口 3000 人に繋がっていると思うと、  
 最初の一步への「勇気」が大切なのだと感じます。

自分の場所に固執することは新しい風を呼び込みま  
 せん。医療・保険・福祉・教育関係の現場の皆さま、  
 CIF Japan は次世代のトライアルを待っています。勇  
 気をもって一步踏み出してください。

\*\*\*\*\*

### 新年度に向けてご挨拶

副理事長

財務担当 梶村慎吾(1996年 Cleveland)

2022年5月21日に東京で開かれたCIFジャパン  
 理事会・総会および6月18日の理事による互選を経  
 て、CIFジャパンの新体制が決まりました。新体制の下、  
 これからこころを新たに、コロナ禍の下で活発な活  
 動が行えなかった過去2年分を取り返せるような活動  
 を復活できるよう期待します。退任された坂本理事長  
 には長らく組織の責任者としての重責を担っていただ  
 きありがとうございました。これからもいろいろお知恵を  
 拝借させていただきたくお願いいたします。

私は1996年から97年にかけて4カ月間のアメリカ  
 でのCIP研修を体験しました。その後研修でお世話に  
 なった組織CIPのCEO、研修組織の代表者、ホーム  
 ステイ先のご家族等と20年を超えて手紙やメールで  
 の交流が続いてきました。昨年にはホームステイ先の  
 主人の娘さんからメールが届き、「父の誕生日にお祝  
 いの電話を父にかけてほしい。当日の電話の内容は  
 録音するようにします。」という内容のものでした。当日  
 それに従って電話を掛けました。(ご病気なのでし  
 ょう。)ご本人は電話に出られませんでした。私からの  
 「お誕生日おめでとうございます」の言葉と励まし  
 の言葉は伝わったと思っています。銀行の勤めを  
 終わり、ボランティア活動に熱心に参加しておられ  
 ましたが、その地域やアメリカの歴史や社会問題に  
 関し、いろいろ教えてくださいました。

わたしにとってCIP研修は、仕事に関する研修と  
 ともに、人々との交流を通して人としての大切な  
 ことを知らず知らずのうちに学ばせていただいた  
 貴重な体験であ

ったと感じています。

現在はコロナ禍のため対面での研修は難しい状  
 況が多いとされています。そのため、ズーム等を利用  
 して現実の対面のない研修も行われています。昨  
 年度ではCIFフィンランドのズーム等を通しての  
 研修をCIFジャパンから藤原さんが受けられ、良  
 き成果を得られました。ズーム等を利用した研修  
 では、また違った心の交流があったはずだと思  
 っています。

最後に、個人的世界のことを書きます。私は、  
 記録を見ると2007年度から財務担当理事を仰  
 せつつかっています。現在16年目となります。CIF  
 ジャパンが特定非営利活動法人の法人格を獲得す  
 る前からのことです。年齢はあえて申しませんが、  
 年齢から言っそろそろ金銭の取り扱いの責任を  
 避けるのが望まれる年頃です。そこで組織とし  
 て財務の責任者をどなたかにバトンタッチする  
 用意をしていただくことが必要になってきたと感  
 じています。本年度の人事は決まりましたが、次  
 年度はどなたかに代わっていただくことを希望  
 します。もし財務担当理事が決まらない場合は、  
 お金の出し入れおよびその記録等担当の会計係  
 を決め、予算・決算・募金計画等、法人全体で  
 決定する必要がある件に関しては理事会で責任  
 をもって担当する等の工夫をすることも考えら  
 れます。CIFジャパンがこれからも力強く発展  
 するためにもこのことは重要なことと考えます  
 ので、是非ともよき結論をこの一年でお考え  
 いただきたくお願いいたします。

\*\*\*\*\*

### ご挨拶

副理事長

江口敏一(1983年 Minneapolis & St. Paul)

「あの時は転職して39歳でのCIP研修」

その年度は、CIPで日本人3名の枠があった。  
 2名は既に決まっており、全社協の中の国際社協  
 日本国委員会より、時間的な余裕がないので電  
 話で参加可否の面接をすると連絡があった。今  
 は亡きLawrence Thompson氏から、自己紹  
 介となぜアメリカに行きたいのか、行って何を  
 したいのか、帰国してそれをどのように生か  
 したいのかと英語で尋ねられ、英語で応え  
 るというものであった。

私は、工学部出身で研究所にて10年ほど金  
 属材料開発の仕事をしているときに埼玉での  
 高齢者福祉施設開設のお手伝いをと頼まれて  
 の転職3年目であり、先進施設について学  
 びたいと思っていた時でタイミングの良  
 いチャンスであった。

一人での海外旅行は初めてで、ユナイテッド航空

で成田からシカゴ経由でニューヨークに向かった。国連ビル前に集合した1983年度のCIP参加者は、80か国150名であり、15の大学のある都市へと分散した。私が参加したミネソタのTwin Citiesへ向かったグループは、24か国30名であった。

4月半ばの残雪があるミネソタ大学でUSAの福祉施策の概略を学び、参加者の出身国の福祉事情を披露しあい相互交流の機会や近隣の福祉施設(幼児教育・看護・地域福祉・行政・裁判所・刑務所等)の見学学習の機会をひと月の間に得た。2か月目から希望専門分野の施設研修で、私はミネソタの街中にあるルーテル系の老人ホーム「アウグスターナホーム」(利用者380名、職員400名、ボランティア700名)で、Social service admissionに配属され、Administrative student(運営管理の実習生)として3か月を過ごした。利用者数を超える職員数を配置し、80名の看護師の勤務を管理するためだけに一人の職員がおり、毎日10名を超えるボランティアが活躍する施設の体験は初めてであった。

施設での実習は「日本の福祉に役立つことなら何でも教えます。プライバシーに関すること以外なら何をコピーしてもいいです。」と言われ、種々の資料をコピーさせていただいた。また、理事会への参加も配慮していただいた。このホームのチャプレンはお年寄りへの講話で「人は3種類に分けられる。他人のものは自分のもの(強盗殺人者など)・他人は他人自分は自分(無関心者)・自分のものは他者のもの(目指す生き方)」、この「もの」とは時間・才能・財力を指すのだと感じた。そして、チャプレンは「あなたは、3番目の人ですよ」と入居者に話しかけておられた。お年寄りに対する対応の仕方以前の姿勢や考え方の大切さを教えられたように思う。可能な限り業務上のマニュアルもコピーしてきた。すべてのマニュアルで「policy」と「procedure」が明確になっていた。日本の介護実習や保育実習が理念よりも方法論を中心に学ぶ学校教育での実習指導の在り方にも違和感を強く感じさせられた。

また、実習期間、直属の上司の計らいで大学のセミナーを自由に受けておいでと言われ、「結婚カウンセリング」「死の準備教育」「医療行為をやめる基準の考え方」等々受講し、その修了証書が帰国後福祉教育に携わる大きな契機ともなった。

ホームステイ先は、ひと月ごとに代わり、最初はミネソタ大学理学部教授の家、次は中学の教員をしている独身男性の家、3番目は大企業の電機メーカーのサラリーマン家庭、そして最後は定年退職し

た老夫婦家庭とバラエティに富んでいた。最初のホームステイ先で「あなたが私の家に来ていただき良かった。私の家を自分の家の様にお使いください。」と言われた。「自分の物はあなたのもの」という考えで来訪者を迎える姿勢に感激した。ホームステイ中には、庭の芝草刈りのお手伝いもさせていただいたが、寄宿舎制の大学の息子の学園祭、知人の自宅庭園での結婚式、教会役員による新任牧師採用の面接等にも連れて行っていただき、他のホームステイ先も含めて学びの多いホームステイであった。

4か月の実習は走馬灯のように終わり、帰国はヨーロッパ経由で、ドイツを中心とした高齢者施設に滞在するなどして一人旅を楽しんだ。

この経験をもとに、高齢者福祉施設建設・経営・職員養成・地域福祉の実践に励むことが出来た。その後、介護福祉士養成校の開設や社会福祉士養成、社会的養護の児童福祉、社会福祉法への改正に伴う地域の子育て支援の核となる施設の展開などに携わってきた。

これらの過程の中でタイから来られたソーシャルワーカーをCIFの実習生として私の施設で受け入れることが出来たのも大きな喜びであった。いくらかでもCIF Japanの働きのお手伝いをしたいと考えている。

<研修先:高齢者福祉施設研修 Augustana Care in Minneapolis>

\*\*\*\*\*

### 「遠慮は美德」ならず

監事 上利久芳(1992年 Cleveland)

1992年のクリーブランドには全世界から30名(16か国)の研修生が集いました。年齢、職種、人種もさまざまでした。全ての研修生に個別のホストファミリー(以下、HFと表示)が用意され、原則2週間ごとに新たなHFに移動するシステムでした。まず全員参加のオリエンテーションがワシントン D.C とクリーブランドで開催され、その後2月半ほど私は「児童福祉施設」(一か所)で貴重な体験学習をしました。ここでは本来の研修内容ではなく、それ以外のエピソードを紹介します。

① 「私は市場の商品？」オリエンテーション終了後、HFのお迎えがあります。HFの到着毎に、それぞれに出発して行きます。HF到着までの気持ちはまるで「市場の商品？」「やっと買い手が来た？」でした。

② 私のお迎えは50代後半(多分)の女性でした。お互いに簡単な自己紹介をした後、同居の御家族に

ついて尋ねると、そのお返事は、「私一人」でした。一瞬、有り得ないと思いましたがどうしようもありません。無事2週間を過ごしました。

③ 次の HF には、お世話になった HF が自動車を送って下さいます。私は、合計5つの HF にお世話になりました。ここでも「荷物をもって売られて行く？」感じがありました。30名の研修生は、原則週1回の合同研修に集います。そこで、それぞれの専門領域の話題などを話し合うのですが、プログラムが3週間目位になると、

④ 私以外のほとんどの研修生が話題にしたのが、「HF」の良し悪しについて、彼らは、「前の HF が良かった」「今の HF を変更してほしい」等の不満を噴出しました。30人のために用意された HF は約100軒強で、貧富の差、居住条件、家族の人柄等がさまざまだったと思います。私一人が「NO CHOICE」(選べられないので、仕方がない)でした。私は、日本人。私の最後(5件目)の HF は、毎年研修生を受け入れている経験豊富なご家族でした。

⑤ その家族との別れの時に「あなたは、GOOD BOY(良い人)」と言われました。この言葉は文字通りの意味ではなく、HF としては「やりがいのない研修生だった」ということの様です。他の国の研修生と違って、注文の少ない日本人の「遠慮は美德」は彼らにとっては、むしろ物足らない文化だったのです。いろいろありましたが楽しい研修でした。

\*\*\*\*\*

**ご挨拶**

理事 加納光子(1977年 Columbus)

故竹内和利初代理事長のご依頼をお受けして理事に就任してから、もう11年目に入りました。当時はまだ現役で勤務していたこともあって、多くを故竹内理事長はじめ他の役員の皆様にお任せしていた状況でした。非常勤勤務になった今も、他に何かやと関わっており、以前と同じく余裕があるとは言えない状況なので、申し訳ないと思っております。

前事務局長の坂岡氏がこの度、理事長になられたので、事務局業務と理事長業務の両方を担当されるのは、あまりにもご多忙であろうという懸念から、事務局業務の中の、ニュースレターに関する業務を担当させていただくことになりました。

今回が初仕事という事で、どうなるか我ながら不安ですが何とか職務を全うしたいと念じております。

私生活では、専門(社会福祉、精神保健福祉の技

術論領域)にかかわりのある活動として、大学教員をしていた時の同僚たちと、以前は月1回、コロナ期(?)に突入後は1年ほど活動休止の後、昨年から2ヶ月に1回くらいの割合で、市民講座に類する教養講座を開催しております。CIF ほどしっかりした組織ではありませんが、高齢者の社会参加・貢献のひとつの形として行っています。そしてどこかの時期で、時々CIF の活動とコラボ出来れば良いな、などと考えております。

最近ではコロナ、ウクライナ以外にも、皆さまご存じのように、驚くような事件が発生しました。安倍元首相の襲撃事件です。以前にも、選挙運動中の候補者が殺害された事件はありましたが、それらの犯人と宗教の問題は無関係でした。今回は、少年期から始まった母親の帰依する宗教団体への多額の寄付による崩壊家庭の中で育った人が、被疑者です。民主政治の問題、政治と宗教の問題、子どもたちへのサポートシステムの問題などを改めて考えさせられました。

このように、コロナが全世界を席捲し、あつてはならない事件が起こり、世の中が目まぐるしく変遷していく中で、ニュースレターの発行を通して次の CIF の展開を皆様とご一緒に考えて行きたいと思っております。

**<< 会費納入のお願い >>**

新年度の会費の納入をお願いいたします。また、昨年度の会費が未納の会員各位には併せて納入をお願いします。(年会費 3000 円)

**郵便振替口座** 番号: 00270-4-54121  
加入者名: CIF ジャパン

**銀行口座** 三井住友銀行 八王子支店  
(店番号 843) (普)7815136

口座名義: CIF ジャパン出納責任者 梶村慎吾

**《編集後記》**

新体制が始まりました。本号は新旧の役員・監事の方々のご挨拶を掲載しております。他の役員・監事の方々のご挨拶は次号に掲載する予定です。

ニュースレターに関しましてこんな記事があったほうが良いとか、これを載せるべしとか、ご意見がありましたら、下記アドレスまでご連絡ください。  
[cifjapannews2022k@gmail.com](mailto:cifjapannews2022k@gmail.com)

なお、本号は、メールアドレスをいただいている会員の皆様には、試行的にメールでもお送りしております。この点に関してもご意見があればお寄せください。

加納光子